Toyo University FD News

FACULTY DEVELOPMENT

第6号

発行／東洋大学FD推進センター

Contents

平成 22 年度　新任専任教員 FD 研修会 …pp.1～3
平成 21 年度　大学院 FD 活動状況報告会・札野順氏特別講演会 …… p.4
大学院における特徴的な FD 活動の紹介 経済学研究科におけるナレッジシートの取組み … p.5
他大学との交流 …… p.6
学外 FD 関連研修参加レポート …… pp.6～7
『東洋大学ＴＡハンドブック』を刊行 …… p.6
東洋大学 FD 推進センター 活動状況報告／活動計画 …… p.8

東洋大学

平成22年度　新任専任教員ＦＤ研修会

研修部会長　神田 雄一

恒例の新任専任教員を対象としたＦＤ研修会を今年度も開催いたしました。例年はＦＤ推進センター独自に開催をしていましたが、今年度は新任教員の方々に対するガイダンス時に合わせて３月 30 日に開催するという新たな形式で行われ、57 名の新任教員のご出席を頂きました。

研修会でははじめに、吉田ＦＤ推進センター長により「東洋大学における FD の取組」と題して講演が行われました。講演では FD とは何か、また本学における FD 活動の基本方針などを中心にお話を頂きました。

続いて、先輩教員の授業実践事例として、国際地域学部の久松佳彰教授より「入口・出口・一石二鳥」、生命科学部の金子律子教授より「生命科学の基礎を身につけるために－実践例－」と題する講演がありました。いずれの講演も御自身の経験を基にした授業の実践例をお話いただき、多くの先生方から授業の準備や進め方、学生の心のつかみ方など大変参考になったとの感想を頂きました。

次に、キャンパス、学部などが異なる新任の先生方が８～９名のグループに分かれて、グループディスカッションをしました。今年度は、３つのテーマ（① FD についてどのように考えたか―今までの経験と当日の講演を聞いて―、②授業の進め方について、③授業アンケートの方法とフィードバックの仕方について）に関して議論をしていただきました。

最後に、グループごとに議論した内容について全体発表をしていただき、問題意識を共有するとともに授業を進めるうえでの課題についての共通認識も得られました。

研修会のグループディスカッション報告レポート、講演資料の一部は、FD 推進センターのホームページ、またはガルーンのファイル管理メニューのＦＤ関連フォルダーから見ることが可能ですので、アクセスしてどのような議論が展開されたか是非ご覧ください。

今回実施した研修については、研修プログラムの内容、開催時期等について改善する点も多々見出すことができましたので、次回に活かしていきたいと考えております。

ＦＤ活動が教育の質を担保するものであること、我々教員の研究を守るためでもあるとの共通理解と認識を得られた意義深い研修会でありました。ご参加いただいた新任教員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 22 年度　新任専任教員ＦＤ研修会

Program

到達目標

① 東洋大学の教育方針を遂行するための FD の位置づけ、教育活動について理解する。
② 東洋大学で教育活動を行うための基礎知識を得る。FD 推進センターの活用方法について理解する。
③ 学習者中心の授業実践について理解する。成績評価やフィードバックについて基礎知識を得る。
④ 授業デザインのための基礎知識、スキルを習得する。
⑤ 同僚とコミュニケーションをとり、希望や不安を解消し、着任後の円滑な教育・研究・社会貢献活動へ導く。

実施概要

第Ⅰ部	講演「東洋大学における FD の取組 ― FD とは何か―」	FD 推進センター長・副学長　吉田泰彦
第Ⅱ部	先輩授業実践事例	
	「入口・出口・一石二鳥」	国際地域学部　久松佳彰 教授
	「生命科学の基礎を身につけるために」	生命科学部　金子律子 教授
第Ⅲ部	グループディスカション	
	① FD についてどのように考えたか ―今までの経験と当日の講演を聞いて―	
	②授業の進め方について	
	③授業アンケートの方法とフィードバックの仕方について	
第Ⅳ部	グループディスカッション内容の発表と質疑応答	

入口・出口・一石二鳥

国際地域学部　久松 佳彰

国際地域学部の長濱（現、名誉教授）先生から依頼を受け、題のような講演を行った。諸事情により 15 分の講演になり聴講者に不便をかけたことをお詫びする。以下、簡単に内容を紹介させて頂く。

授業をデザインするにあたって、入口（学生の事前準備とイメージ）と出口（3 年秋･冬からの就職活動で学生が語る「打ちこんだこと」の一つに大学での学びが入ること）を念頭に置く必要がある。そして、その当該授業がカリキュラムの中にどう位置づけられているかも考える必要がある。

三題話の最後の一石二鳥というのは、特に授業実施時の自戒である。その講義が、学生のキャリア形成のどこに使えるのかということを意識し、そしてそのことを明示的に語りながら授業を行うことが大事だろうということを申し上げさせて頂いた。どうしても、教員は自分が教える教科の真髄のみを精魂こめて教えたくなってしまう。しかし、履修にあたって学生はそれが自分のキャリアにどう使えるのかという判断基準を持っていることに配慮する必要がある。キャリア形成に関連した余談として、今年の一年生に配布した『My Career Note 2010』のスタディスキル編作成にキャリア形成支援センター委員の末席を汚して私も関わらせて頂いたので、簡単に宣伝させて頂いた。未見の諸兄姉には御高覧頂ければ幸いである。

上述の授業デザイン及び授業実施時の注意は、その授業に合ったオリジナルの授業ティップスによって効果的に支えられよう。プリントに印刷して配布させて頂いた授業ティップスには色々なものがある。例えば、チャイムと同時に授業を始め、授業の真ん中で数分の休憩を取り、授業再開後はチャイムまで行い、その休憩時間には音楽を流すことによって時間管理を有効に行う。基礎ゼミにおいては初回にグループ毎に名札を掲示してもらい集合写真をとり顔と名前を早期に一致させること、などである。細かい工夫を通して教員の思いが学生に伝わる可能性もある。

後日談となるが、講演がきっかけとなって授業見学のお話を頂き、自分の 1 年基礎ゼミとミクロ経済学Ⅱ（原論レベル）をここ二年間の新任教員に開放する機会を得た。新しい Exposure の経験とフィードバックは、私にとって漁夫の利であった。労を取って頂いたＦＤ推進センター、ＦＤ推進支援室に感謝する。

生命科学の基礎を身につけるために －実践例－

生命科学部　金子 律子

既に教育経験の豊富な先生方には釈迦に説法と思いましたが、東洋大学での教育活動に関して少しでもご参考になることがあればと、教育目標などを含めた授業実践例の紹介をさせて頂きました。

東洋大学では各学部あるいは各学科毎に教育目標やディプロマ・ポリシーを掲げています。生命科学部でも「(1) 極限環境に生育する生物からヒトにいたるまでの生命現象に関する基礎知識と生命現象を解析する基礎的技術を修得した上で、専門的な知識を獲得すること。(2) その上で、創造的思考能力を磨くことにより、「生命」「環境」「食」の各分野における先端科学や高度な技術開発に挑戦することができること。(3) さらに、高い倫理性と幅広い視野、豊かな人間性と自立心を備え、地球社会の発展に貢献するという強い意志を有すること。」をポリシーとしております。こうした目標の下で以下の①～⑤の流れに則って教育活動を行っております。①学部・学科の目標に沿って、担当する科目の位置付けをする。②次に科目毎の教育目標を立てる。③科目の目標達成に伴う問題点およびその解決策を考え実践する。④実践成果を試験での学生の理解度および授業アンケートから判断する。⑤翌年の講義にフィードバックする。

次に、この流れに則って行った具体例として、私が担当しております必修科目「基礎生物学」(生命科学部生命科学科1年生対象) について、2009年度に行った実践を具体的に紹介致しました。簡単に要点のみ述べますと、この科目は、上述のポリシーのうち、「(1) 生命現象に関する基礎知識」の習得および「(3) 高い倫理観と幅広い視野・・」など教養教育を行うべき位置にあります。そこで科目の教育目標はこれらを達成することが第一となります。年度の始めに教育目標実現を考えた際、幾つか現実的な問題点が浮かび上がりました。例えば、(A) 学生のレベル差が著しい (高校で「生物」を履修していない学生から「生物」を受験で選択した学生まで混ざっている)。(B) 知識が単語のみの暗記になりがちである。(C) 生命科学に関する一般教養を講義の中で身につけさせるのが難しい、等々です。そこでこれらの問題に対して、問題解決策を考え実施致しました。例えば今年度は、上記の (A) に対しては、前回の講義内容を問う「小テスト」を毎回行い、知識の定着を図る。(B) については、小テストに記述式問題を多くし、自分で説明できる知識とすることや文章作成力を高める。(C) に関しては、生命科学に関する一般書を読み (今年度は朝日新聞などに文章を掲載している福岡伸一氏の新書3冊を推薦した) 感想文を書いてもらう、こと等々を実施致しました。(小テストの実施法や感想文の製本化など、学生の力を向上するための工夫点を研修会では少し具体的に紹介致しましが、ここでは割愛致します。)

教育方法は教員毎に異なって当然です。また私自身も、自分としては①から⑤の流れで考え、前年より改善した講義を行ったつもりでも、実際は思ったように教育効果が出ないことも多く、試行錯誤を繰り返しております。学生の気質も年々変化しますし、1科目1科目が上げられる教育成果も全体から見るとそれ程大きなものではありません。しかし学部や学科内で共通の問題意識を持ち、創意工夫を共有することにより教育効果が高まると期待されます。今回の実践例紹介が、そうした取り組みの一助になればと思います。

授業実践事例の講演と公開授業に参加して

総合情報学部　喜岡 恵子

大学新任教員事前研修において、授業実践事例に関するご講演を拝聴した。その授業の綿密さに驚かされ、そのような勉強がしたくなる (せざるを得ない) 授業が受けられる学生を羨ましく思った。生命科学部の金子先生と国際地域学部の久松先生の授業実践である。

私の担当する入門心理統計学は授業の性質から金子先生のやり方を踏襲することにした。まず小テストを毎回行って知識の定着をはかる予定だったが、なぜか、ほぼ毎回宿題を出して、次の授業開始時に宿題の解答を示し、自己採点後提出させる形式に変わってしまった。残念ながら私のやり方では知識の定着には必ずしもつながらなかったようだ。たぶん宿題をしないで解答を写して提出する学生が少なからずいたからであろう。出欠確認のためだけの宿題提出ではなく、その場で実力を試され、評価につながる小テスト形式に次回は改めて、本来の金子先生流にチャレンジしてみようと思う。

さて、授業をやっとの思いでこなしていた6月、ＦＤ推進センターから新任教員対象の「公開授業の案内」が届いた。久松先生の公開授業であった。「基礎ゼミにおける授業の進め方」に参加した。「何だろう？学生と先生とのこの一体感！」がゼミの第1印象であった。久松先生から、「大学一年生は知り合いを増やしたいと思っており、知り合いには負けたくないとも思っています。教員の真似はしませんが、教員に誉められるのは悪い気持ちはしないようです。」とお伺いしたので、入門心理統計学で模範的な解答を書いていた学生に解説をしてもらった。確かに私が解説するより学生の注目度が高かった。

金子先生、久松先生の、学生の心をつかむ、細やかで緻密な気遣いと実行力は簡単には真似できないが参考にさせていただき、自分流を見つけていきたいと模索する日々である。

平成21年度
大学院ＦＤ活動状況報告会・札野順氏講演会

開催日時：平成22年3月12日(金)　13：00～18：30
会　　場：6310教室（白山キャンパス6号館3階）
第Ⅰ部　FD活動状況報告会：「研究科におけるFDへの取り組み状況の報告・質疑応答」
第Ⅱ部　特別講演「研究者の倫理とは何か―予防倫理を越えて―」

平成19年度より、各研究科・大学院のFDへの取り組み状況を共有する場として、「大学院ＦＤ活動状況報告会」を開催しております。

はじめに、学長より「学生の満足度を高めるという観点から、多様な大学院生に対するきめ細かな対応が必要であるため、大学院のＦＤ活動が行われている。第Ⅰ部の各研究科からの報告では、本学で学ぶ大学院生が、高度職業人あるいは自立した研究者として育っていくために、どのようなサポートが出来、実行しているか、聞けることを期待している。」と挨拶がありました。

第Ⅰ部は、各研究科・大学院が平成21年度のFD活動状況の報告と研究指導の改善点を紹介し合い、他研究科の活動を学び合う機会です。今年度の報告事項は次の3項目を中心に、研究科委員長、大学院長より説明されました。

(1) ２１年度のＦＤ活動結果の主要な成果と課題及び２２年度の活動目標
(2) 博士前期課程における研究指導の主要な改善について
(3) 博士後期課程の研究指導の主要な改善について

報告会後の質疑応答･討論会の場では、「大学全体で考える必要がある」ことなどが指摘され、本学の教育活動の発展に寄与する活発な意見交換がされ、司会の長濱部会長より、「大学院におけるFD活動の奨励は、東洋大学内の研究科だけでなく、日本国内のすべての大学院改革と絡んでいる。もはや個々の教員レベルのみでFDに取組んでいればよい、ということは通用しない環境であることを理解する必要がある。」と助言がありました。

第Ⅱ部は、金沢工業大学教授・札野順氏をお招きし、「研究者の倫理とは何か―予防倫理を越えて―」と題する講演会を開催しました。「科学技術倫理とは何か、今それを理解する必要性」について、「国内の動向と諸外国の動向、ユネスコによる既存の倫理要領などの分析」等について講演がありました。特に大学院において考慮すべき価値と行動規範について学ぶ、大変貴重な機会となりました。参加者からは「技術者倫理に関して、法令順守型と価値共有型があり、新鮮であった」「本学独自の技術者倫理教育を行う必要がある」という意見が寄せられました。

なお、当日参加出来なかった方のために、FD推進センターでは、当日の資料と映像を保管しております。ご希望の方はFD推進支援室までご連絡いただきますようお願い申しあげます。

東洋大学大学院におけるＦＤ活動の取り組みと課題

前大学院部会長　長濱　元

大学院のＦＤ活動は文部科学省による「大学設置基準」の改正に伴い、平成１９年度に義務化された。私はＦＤ委員会設置以降、２１年度まで3年間大学院部会の部会長を務めさせていただいた。３年目には大学院部会のメンバーもほとんどが入れ替わった。ただし、全ての研究科ではＦＤ活動は継続的に推進されており、どのよう進めていくかが大きな課題と考えてきた。

文科省の指導では“組織的に進めること”が強調されている。大学院部会では、「法科大学院」と「学際・融合科学研究科」が発足当初からＦＤ活動の組織的推進を義務づけられていたという事情があり、設置当初から組織的な推進が図られていた。したがって、その他の研究科の組織的推進が課題であった。１９年度以降各研究科において、それぞれのやり方でＦＤ活動を推進してきているが、大学院の場合、学部の場合に較べれば各研究科の活動形態はより大きな特徴があり、ＦＤ活動を形式的に一律化することは馴染まないと考えたので、２０年度以降はそれぞれの特長ある活動を工夫する中で、それぞれが組織的な活動を強めていくことを活動方針としてきた。

２１年度はそれまでの特徴ある活動をいっそう洗練させるとともに、研修部会と共催で「アカハラ・パワハラに関する研修会」を１１月に開催し、２２年3月に開催した「大学院部会ＦＤ活動報告会」では、各研究科の報告に加えて「研究者倫理」に関する講演会を実施した。

３年間の東洋大学大学院各研究科・専攻のＦＤ活動を細かく見ると、それぞれその取り組みの熱意や活動内容には温度差があることは事実である。それはそれぞれのよって立つ学問の内容・性格にもよるが、その精神的風土による差も大きい。非常に熱心かつ創意・工夫を働かせて活動に取り組んでいる研究科・専攻もみられるので、それらをモデルとして独自のユニークな活動を実現していくことが、多くの研究科・専攻の今後の進むべき方向であると考える。

また、東洋大学大学院全体としてみると、その基盤には大きな課題が潜んでいると考えられる。それは、全体的な組織としての体制が人的にも物的にも、一流の大学院を目指すには十分ではないということである。その点で大型の外部助成を得ている「学際・融合科学研究科」はその中では抜きんでているが、その他の研究科においては一流大学院のレベルに追いつき、追い越すための武器として何らかの措置が必要のように思われた。

特に国際的な交流を継続的に実施できるような資源が、今後の大学院の活動の為には必要であり、財政的・人的なサポートの強化が望まれる。

経済学研究科におけるナレッジシートの取組み

経済学研究科公民連携専攻　根本 祐二

ナレッジシートとは、

(1) PPP の 8 つの領域（経済学、財政、金融、PPP 制度手法、公共プロジェクト、民間プロジェクト、事例）ごとに 3 個ずつ計 24 個のキーワードにつき、

(2) 知識の程度を、レベル 0「知らない」からレベル 6「問題点を知っていて改善点も示せる」までの 7 段階で自己評価し、

(3) それを円に図示することによって、自分の得意不得意を把握し、履修科目の選択や研究計画の策定に役立てるためのツールである。

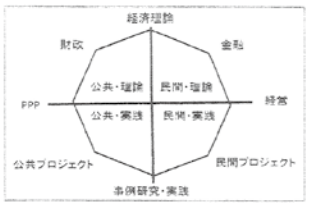
2006 年の本専攻開設時より、入学時に実施する方式でスタートし、2007 年以降文部科学省大学院教育改革支援プログラム（GP）の対象プロジェクトの一つとして、改良を重ねている。現在は、円形で図示する際には、上半分に理論系領域、下半分に実務系領域、右半分に民間分野、左半分に公共分野を配置することで、各人の図形の違いが一目瞭然で把握できるようにしている。この方法は、最初の領域分けと領域ごとのキーワード設定さえ適切に設計できれば、あとは自動的に図表が描けるので、工数的には非常に楽である。自己評価なのでレベルの客観性は担保されないが、成績等への連動はしないことを表明しているので、不当に甘いという例はあまり見られない。仮に、自分に甘いとしても、他者と比較するものではなく自分の中でのバランスを見るだけなので、問題はないと考えている。

意外だったことは、社会人大学院生のバックグラウンドによって図形が全く異なることだった。優秀な公務員が実は民間系（右半分）はほとんどゼロ評価であったり、実務未経験だが理論系（上半分）には強みを持っている人材を発見できるという意味では、むしろ教員による指導や支援のツールとして使うべきではないかと考えている。問題点は、入学当初では早すぎるのではないか、わずか 24 個のキーワードで把握できるのか、連続性を重視してキーワードを変更しないでいるうちに陳腐化が進んでいるのではいないかという点である。このため、2010 年度はキーワードを大幅に増加するとともに、1 セメスター終了後に実施する方法を試行する予定である。

この手法は、PPP はもとより社会科学に限らずすべての学問領域にある程度は有効ではないかと考えており、是非各所で試行され、さらに改良が進むことを期待している。

（参考）ナレッジシート

① 3個×8領域＝24個のキーワードの知識水準を自己申告させる。

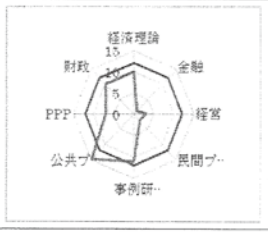


例：金融（プロジェクトファイナンス）、財政（債務負担行為）、PPP（官民競争入札）、事例（歌舞伎町ルネッサンス）

レベル 0	聞いたことがない
レベル 1	聞いたことはあるがどういう分野の用語か知らない
レベル 2	概ねどんな分野の用語かは知っているが、意味は分からない
レベル 3	大まかには意味も分かっているが、説明できるほどではない
レベル 4	意味もある程度は分かっていて、他者に説明することができる
レベル 5	内容を詳細に分かっていて、背景や問題点も知っている
レベル 6	今後発展させるべきあるいは改善すべき点について自分の意見を持っている

② 個人別にダイアグラム化しフィードバックする。

B氏（官庁）



評価とアドバイス

公共系（左半分）の水準が高いのに対して、民間系（右半分）の水準が低く、典型的な公務員型を示しています。理論系（上半分）と実践系（下半分）の比較では、経済理論、事例研究・実践ともに高く、理論から実践まで幅広い知識の吸収力があると言えるでしょう。これに、民間系（右半分）の知識が補われることで、理想的なまとまりの良い知識体系を描くことが可能になります。

③ 科目と分野の関係を示して履修指導に用いる。

			経済理論	財政	金融	経営	PPP	公共プロジェクト	民間プロジェクト	事例研究・実践
春学期										
技術経営論	月	6								
PPPファイナンス論	月	7								
財務計画論	火	6								
地方行財政論	火	7								
経済学基礎	水	7								
起業とPPP	木	6								

・・・・・・

他大学との交流（平成22年3月～平成22年8月）

教育活動について他大学と学び合うことは、「規範」の無い FD 活動を推進する上で、自大学ではどのように取組んでいくことができるのか、考える際にとても参考になります。平成 21 年度より、法政大学・青山学院大学・立教大学・東洋大学の FD 推進センター長（委員長）と事務担当者が集まり、同規模大学が共通に抱えている FD 関連の問題点改善のための情報収集を目的とした意見交換会「関東圏ＦＤ連絡会」を開催しております。

●第 2 回　関東圏連絡会

◇概　要

各大学におけるＦＤ活動状況報告の後、①FD を推進するための組織のあり方について、②各大学における教育改善支援制度について、話し合いました。

◇日　時：平成 22 年 3 月 17 日（水）
16：00 ～ 17：30

◇参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学の FD 担当者　計 12 名

●第 3 回　関東圏連絡会

◇概　要

各大学におけるＦＤ活動状況報告の後、教員・職員と同じく大学を構成する学生をどのように巻き込むことが出来るか、その重要性や現在の課題等について話し合いました。

◇日　時：平成 22 年 6 月 16 日（水）
16：00 ～ 17：30

◇参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学の FD 担当者　計 15 名

学外ＦＤ関連研修会参加レポート

平成22年度ＦＤ推進会議（新任専任教員向け）「大学教員の職能開発とＦＤ」

根建 拓、廣津 直樹、宮西 伸光

8月9日～10日、私立大学連盟主催の「ＦＤ推進会議」がグランドホテル浜松で開催され、本学生命科学部より3名の新任専任教員が参加しました。本会議は「大学教員の職業的規範を明確にし、所属大学の個性ある教育理念を客観的に理解すること、また、今後の私立大学教育の発展に寄与することのできるプロフェッショナルな人材の育成すること」を目的とし、下記プログラムで構成されました。

プログラム

1) パネルディスカッション

平成21年度のFD推進会議に参加した3名の新任教員より、実情報告がありました。パネリストの1人には、本学より長坂征治准教授が出席しました。

2) グループ討議（自己紹介、各私立大学における現状等）

7～8人程度の小グループに分かれて、自己紹介や各私立大学における授業の現状について説明しました。

3) 模擬授業ワークショップ（模擬授業15分・質疑応答15分）

各先生が普段行っている授業を15分で模擬授業をする事によって、自己の日々の授業を見直すというプログラムでした。どの様な姿勢で授業を聞けば良いか、また授業をする側は、できるだけ普段と変わらない授業を心がける等の点に留意し、模擬授業に関する概要・レジュメを作成しました。翌日、小グループに分かれて模擬授業ワークショップを行った後、ディスカッションを行いました。

4) 全体でのふりかえり

最後に、本研修参加者全員が集まり、各グループにて行われた模擬授業やディスカッション内容について各グループ代表から報告がありました。

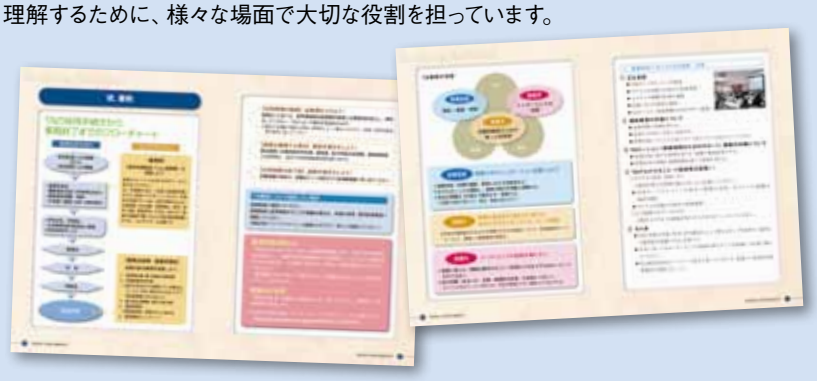
声 得るものの多い非常に有用な会議であった。授業方法に悩みを持つ新任教員はもちろん、現状で特に授業方法に悩みがない新任教員であっても、参加することで多様な授業方法を知るとてもよい機会になると思われるため、来年度以降も新任教員の積極的な参加を期待したい。

声 本FD会議は着任4年以内の新任教員を対象にしたものであった。そのため本FD会議は、「FDとは何か」という定義づけから始まった。エリート教育機関としての大学から大学全入時代の大衆教育期間としての大学へと変化しつつある今日の大学では、学生の知識・理解度に合わせた教育を行う必要があり、学士力を身に付けた人材を育成し続けるために、我々教員が教育方法を研鑽する必要がある。そのための取り組みが「FD」として行われている。しかしひとくちに「FD」と言っても、狭義には「各教員の授業内容・方法の改善」という意味合いがあるのに対し広義には「教育活動の他に研究活動・社会貢献・大学運営に関わる教員の職能開発」という意味合いをも持つ。非常に幅広い内容であり、大学（教員）に求められている使命の幅広さを表している。

声 分野が異なる先生の模擬授業は非常に新鮮で、参考になる内容の講義だった。また授業内容としては法学系・薬学系の先生の授業において、15回の講義回数では国家試験に対応できる様な授業をする事が大変難しく、授業内容がどうしても「単語詰め込み式の内容」になってしまうという報告があり、深い内容を、より面白く、という事になると、大学の現状からは非常に難しいという小グループ共通の意見が出た。

『東洋大学TAハンドブック』を刊行しました

TAが、教育補助員としての位置付けと役割、業務内容等について理解し、また、教員と学生をつなぐ立場として、きめの細かい教育を実現するために役立てていただくことを目的として、このハンドブックを刊行いたしました。学部教育の質の保証が求められている中で、教育の一端を担う教育補助員は、すべての学生が授業内容を十分に理解するために、様々な場面で大切な役割を担っています。



ＦＤ推進センターホームページ
（http://www.toyo.ac.jp/fd/tahd_j.html）からも
ダウンロード出来ますので、ぜひお役立てください。

第10回山形大学基盤教育ＦＤ合宿セミナーに参加して

経済学部　曽田 長人

8月2日～3日にかけて山形大学蔵王山寮で開かれた「第10回山形大学基盤教育ＦＤ合宿セミナー」へ参加する機会を得たので、以下このセミナーの模様を簡単に報告させて頂く。

北は八戸短期大学、南は岡山県立大学に至るまで、15の大学から30名の教員の参加があった。1)「大学へのニーズと課題」、2)「理想の大学を作る」、3)「科目設計Ⅰ：授業名と目標、内容の作成」、4)「科目設計Ⅱ：シラバスの完成」という4つのプログラム（各90分）が設定され、参加者は6つのグループに分かれそれぞれのテーマに関するグループワークを行った。グループワークの終了後は作業の成果を発表し全体討論を行った。

1）大学へのニーズとしては（人格・学力面での）基礎力と専門能力、コミュニケーション力、就職に必要な力の養成、社会･地域への貢献、国際性等の点、課題としてはマンパワーの不足、幅広いレベルの学生への対処、改革の目的が不明瞭等の点が挙げられた。

2）「理想の大学」の内容としては「好きなことが思いきり学べる大学」「人間力のある学生を育てる大学」「地域・社会への貢献を重視する大学」等が提案された。

3）各グループの課題となった授業は、①「大学の個性を発揮する授業」②「地域性と関連する授業」③「国際性を培う授業」④「21世紀の諸課題に対応する授業」⑤「職業意識と労働意欲を培う授業」であり、これらに対応した授業名と学習目標の設定を行った。

4）上のプログラムⅢで作成した①～④の授業について、シラバスを作成した。山形大学でのシラバスに則り、学生を主体とした記述とすることが求められた。

全体の感想として、様々な大学や教員の置かれた状況、大学・教員毎のＦＤとの取り組みについて、多くのことを学ぶ良い機会となった。今回は、参加者が講師の話を一方的に聞くのではなく、グループを結成してその場で問題について考える、参加型のセミナーであった。学習の成果が実感できたので、似た学生参加型の授業を、今後、自分の授業でも取り入れて行きたいと思った。最後に、合宿が開かれた蔵王山寮の環境が素晴らしく、参加者一同の頭の働きも活性化したように思われたことを特筆しておきたい。

「学生FDサミット・2010夏」に参加して

文学部　斎藤 里美

8月28日（土）、29日（日）の両日、立命館大学で開催された「学生FDサミット・2010夏　―大学を変える、学生が変える―」に、文学部の学生6名、社会学研究科の大学院生1名と斎藤の計8名で参加した。「学生FDサミット」は、全国の大学生が一堂に会し、大学教育の改善に向けた議論と交流をしようという試みである。今回は、2009年夏、2010年冬に続いて第3回目にあたる。全国の合計38大学から212名（教職員を含む）が参加した。

この「学生FDサミット」の主なねらいは、学生自身が大学教育の改善に取り組む活動を報告・議論しあい、学生によるFD活動の輪を広げることである。主催した立命館大学では、2006年度から大学教育開発･支援センターのFD活動に参加する学生スタッフ（学生FDスタッフ）を募集してきたという。今回の学生FDサミットの企画運営もこの学生FDスタッフたちが中心に担っていた。

1日目（28日）は、午前のオープニング行事の後、午後は小グループに分かれて「サミット交流タイム」（95分）と呼ばれる交流活動を行った。夕方からは、さらに小グループに分かれ、しゃべり場「大学の教育の意義」（100分）と呼ばれるプログラムがあり、テーマに添って自由に討議した。用意されたテーマは、①大学の教育と高校までの教育②どんな授業を望んでる？③学生生活を充実させるには？④成績評価についてどう思う？⑤大卒ってなんだろう？の5つである。また2日目(29日）午前には、10大学の学生によるFD活動報告があった。その後、グループワーク「大学の教育の意義」では、前述の5つの中から各自が希望するテーマの小グループ（10人程度）に分かれて議論を行い、その後各グループの代表者によるグループワークの報告と質疑があった。東洋大学の学生もグループ代表として檀上に上がり、200人の聴衆を前にして印象に残る報告をした。初参加でありながら気負わず取り組む学生の姿に、大いに励まされた2日間であった。

平成22年度 東洋大学FD推進センター 活動状況報告（平成22年3月～平成22年8月）

東洋大学ＦＤ推進委員会

◆第１回
●開催日時：平成 22 年 4 月 21 日（水）14：00 ～ 15：00
報告１　各部会活動状況報告
報告２　センター長報告　①第１期ＦＤ委員会からの引継事項への対応について
②第２回関東圏ＦＤ連絡会
協議１　平成 22 年度ＦＤ推進センターの活動方針と活動計画について
協議２　各学部・研究科・法科大学院のＦＤ活動状況の報告について
協議３　FD 推進委員会の運営について

◆第２回
●開催日時：平成 22 年 7 月 24 日（土）10：00 ～ 12：40
報告１　各部会活動状況報告
報告２　各学部･研究科･法科大学院における2010年度春学期FD活動状況報告
報告３　センター長報告　①第３回関東圏ＦＤ連絡会
協議１　一般教員向けＦＤ研修会の開催について
協議２　平成 22 年度学部ＦＤ活動状況報告会の開催について
協議３　学生による授業アンケートの全学的取扱いについて
協議４　東洋大学教育補助員採用内規の修正について

研修部会

◆第１回部会
●開催日時：平成 22 年 5 月 15 日（土）10：00 ～ 12：00
議題１　平成 22 年度大学新任専任教員事前研修（ウェルカムガイダンス）開催報告
議題２　一般教員向けＦＤ研修会の開催について
議題３　平成 22 年度テイーチング・アシスタント
FD(Faculty Development) 研修会の開催について

大学院部会

◆第１回部会（メール会議）
●開催日時：平成 22 年 7 月 9 日（金）～ 15 日（木）
議題１　大学院でのＦＤ活動において推進することが望まれる事項の抽出
議題２　同活動における問題点の抽出
議題３　抽出項目に対する具体的な措置や対応について課題の整理

授業改善対策部会

◆第１回部会
●開催日時：平成 22 年 5 月 27 日（木）10：00 ～ 11：45
議題１　平成 21 年度授業改善対策部会の活動報告
議題２　平成 22 年度授業改善対策部会活動計画について

編集部会

◆第４回部会（平成 21 年度）
●開催日時：平成 22 年 3 月 30 日（火）15：15 ～ 17：00
議題１　ＦＤニュース第６号の刊行について
議題２　ＴＡハンドブックの刊行について
議題３　ＦＤハンドブック〔改訂版〕の刊行について

◆第１回部会
●開催日時：平成 22 年 4 月 24 日（木）10：00 ～ 11：00
議題１　ＴＡハンドブックの刊行について
議題２　ＦＤニュース第６号の刊行について
議題３　ＦＤハンドブック〔改訂版〕の刊行について

学内公開活動

平成 21 年度大学院ＦＤ活動状況報告会・ＦＤ講演会
●開催日時：平成 22 年 3 月 12 日（金）13：00 ～ 17：45
●会　　場：6310 教室（白山キャンパス６号館３階）
●参加対象：教職員・大学院生　　●参加人数：約 40 名
＜報告会プログラム＞　　司会　大学院部会長　長濱　元
1. 挨　拶 ……（学長・竹村牧男）
2. 第Ⅰ部　大学院ＦＤ活動状況報告会 ……（研究科委員長・法科大学院長）
3. 総括 ……（センター長・吉田泰彦）
4. 第Ⅱ部　特別講演「研究者の倫理とは何か―予防倫理を越えて―」
……（金沢工業大学大学院教授　札野 順氏）

平成 22 年度新任専任教員ＦＤ研修会（FD プログラム）
●開催日時：平成 22 年 3 月 30 日（土）10：00 ～ 13：00
●会　　場：研修会　6302 教室（白山キャンパス６号館３階）
●参加対象：新任専任教員　　●参加人数：57 名
＜報告会プログラム＞　　司会　研修部会長　神田雄一
1.「東洋大学における FD の取組」……（センター長　吉田泰彦）
2. 先輩授業実践事例①　……（国際地域学部教授　久松佳彰）
3. 先輩授業実践事例②　……（生命科学部教授　金子律子）
4. グループディスカッション
5. グループディスカッション内容の発表
6. 総括 ……（センター長　吉田泰彦）

平成22年度東洋大学FD推進センター活動計画（平成22年9月～平成23年2月）

ティーチング・アシスタント　FD(Faculty Development) 研修会
●開催日時：平成 22 年 9 月 25 日（土）14：00 ～ 17：00
●会　　場：6B13 教室（白山キャンパス６号館地下１階）

平成 22 年度一般教員 FD 研修会「大学教員の PD とライフ･ステージ」
●開催日時：平成 22 年 10 月 23 日（土）13：30 ～ 17：00
●会　　場：6203 教室（白山キャンパス６号館２階）
●講　　師：羽田　貴史氏（東北大学高等教育センター教授）

自己点検・評価委員会講演会
「大学改革・授業改善時必要な資料とは何か？
インステイテユーショナル・リサーチとは何か？」
●開催日時：平成 22 年 10 月 30 日（土）13：30 ～ 15：30
●会　　場：5201 教室（白山キャンパス５号館２階）
●講　　師：山田　礼子氏（同志社大学社会学部教授、
高等教育・学生研究センター長）

第３回授業改善事例シンポジウム
●開催日時：平成 22 年 11 月 13 日（土）13：30 ～ 18：30
●会　　場：6203 教室（白山キャンパス６号館２階）

平成 22 年度学部 FD 活動状況報告会
●開催日時：平成 22 年 12 月 18 日（土）
●会　　場：6203 教室（白山キャンパス６号館２階）

平成 22 年度大学院ＦＤ活動状況報告会
●開催日時：平成 23 年 2 月または 3 月
●会　　場：白山キャンパス６号館（教室未定）

Toyo University FD FACULTY DEVELOPMENT News

東洋大学FDニュース 第６号
発　行：東洋大学FD推進センター
発行日：平成22年9月30日
〒112-8606　東京都文京区白山5-28-20
TEL 03-3945-7253　FAX 03-3945-7395
http://www.toyo.ac.jp/fd/index_j.html

Toyo University 125th Anniversary
東洋大学は平成24（2012）年に創立125周年を迎えます

Japan University Accreditation Association UNIVERSITY ACCREDITED 2008. 4～2015. 3

東洋大学は平成19年度に（財）大学基準協会による大学評価（認証評価）を受け、「大学基準に適合している」と認定を受けました。
この認定マークは、大学が常に自己点検・評価に取り組んでいること、そして社会に対して大学の質を保証していることのシンボルとなるものです。